

鹿児島県総合教育センター

平成22年度長期研修報告書

研究主題

英語で意欲的に自己表現を図る

「書くこと」の指導の在り方

—中・長期的な到達目標に基づく課題設定と指導過程の工夫—



鹿屋市立吾平中学校

教諭 下野 哲生

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	1
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	1
3	研究の計画（構想図）	2
III	研究の実際	2
1	英語の授業における「書くこと」	2
(1)	学習における書く活動	2
(2)	英語で書く上での課題	3
2	本校生徒の英語学習に関する意識調査の分析と考察	4
(1)	英語学習の現状	4
(2)	英語で身近な出来事等を書く力	6
3	中・長期的な到達目標の設定	6
(1)	目標とすべき「まとまりのある英文」	6
(2)	「書くこと」における年間指導計画の必要性	9
4	「書くこと」に習熟させるための手だて	9
(1)	既習事項を関連付けた学期単位の指導モデル	9
(2)	学期末の単元におけるまとまりのある英文作成の指導過程の工夫	10
5	研究主題に関する実践例	11
(1)	各学年の「書くこと」の到達目標	11
(2)	書く題材と目標モデル文	11
(3)	「書くこと」の年間指導計画の実際	13
6	検証授業の実際と考察	18
(1)	検証授業Ⅰの実際	18
(2)	検証授業Ⅱの実際	21
7	検証授業Ⅰ及びⅡを通した生徒の変容	25
(1)	目標モデル文との比較から	25
(2)	生徒の作品の変化から	25
(3)	生徒の自己評価から	26
IV	研究の成果と課題	27
1	研究の成果	27
2	研究の課題	27

I 研究主題設定の理由

新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる領域で一層重要性を増す「知識基盤社会」においては、基礎的・基本的な知識・技能を習得させるとともに、それらを活用するための思考力・判断力・表現力等が必要である。

平成20年3月の中学校学習指導要領改訂の趣旨においては、社会や経済のグローバル化が進む中、単に受信した外国語を理解するにとどまらず、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」の育成が重要であると指摘されている。このことから「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等について自らの体験と結び付けながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信できるよう、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」という4技能を総合的に育成する指導の充実が求められた。

本校においても4技能の総合的な育成を目指しているが、「書くこと」に関する指導については最も課題が多い。本校英語科では、授業で学んだ新出の言語材料等を終末時に書かせたり、ワークシートを活用して家庭学習を具体的に示したりして、書く時間と量を確保しようとしてきた。しかし、依然として生徒の多くは英語を書くことに大きな抵抗感があり、読み手を意識し、内容にまとまりのある文章を書く活動においては、教師の支援によってようやく活動を成立させている状況がある。平成21年度「基礎・基本」定着度調査における「書くこと」の通過率は、中学1年生が52.9%、中学2年生は29.5%であり、本県の通過率をそれぞれ7.8%、18.3%下回っている。身近な話題について自ら書いて表現する場面では無解答の割合が高くなっていることも特徴である。

生徒が英語を書いて自己表現できない要因に、書くことに習熟しておらず自信をもって英文を作成できないことが挙げられる。これまでの授業で書く活動が十分に行われていなかったこと、生徒の学習段階や発達の段階に即した身近な話題について書かせる活動が適切に設定されていなかったこと、書く活動の基盤となる語彙や文構造の知識が定着していなかったことなどが考えられる。

本県教育委員会は「基礎・基本」定着度調査の結果を受けて「まとまりのある文章を書く力を高めるために、身近な話題を提示し、どの程度定着させたいかの中・長期的視点でとらえ、継続的な指導を行う必要がある。」と総括している。

本研究において、生徒が意欲的に英語で書いて自己表現ができるように、年間や各学期といった中・長期的な到達目標に基づく、生徒に身近な課題設定と指導過程の工夫について研究を進め指導を行えば、段階的にまとまりのある文章が書けるようになるのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究の構想

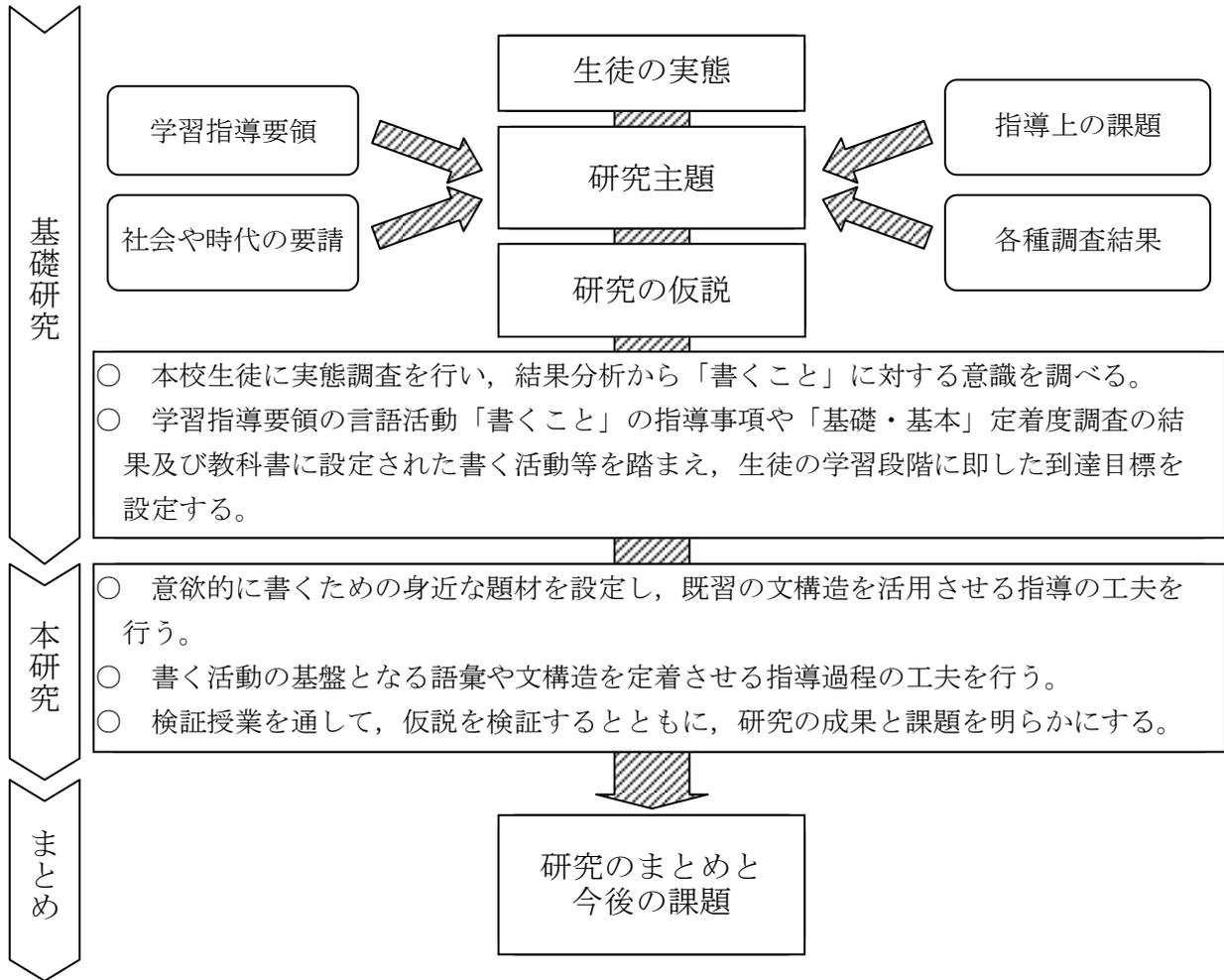
1 研究のねらい

- (1) 本校生徒に実態調査を行い、結果分析から「書くこと」に対する意識を調べる。
- (2) 学習指導要領の言語活動「書くこと」の指導事項や「基礎・基本」定着度調査の結果及び教科書に設定された書く活動等を踏まえ、生徒の学習段階に即した到達目標を設定する。
- (3) 意欲的に書くための身近な題材を設定し、既習の文構造を活用させる指導の工夫を行う。
- (4) 書く活動の基盤となる語彙や文構造を定着させる指導過程の工夫を行う。
- (5) 検証授業を通して、仮説を検証するとともに、研究の成果と課題を明らかにする。

2 研究の仮説

英語の「書くこと」における中・長期的な到達目標を設定し、生徒の興味・関心に基づいた書く課題の設定及び語彙や文構造を習熟させるための指導過程の工夫を行えば、意欲的に英語で自己表現をしようとする生徒を育成することができるのではないかと考えられる。

3 研究の計画（構想図）



III 研究の実際

1 英語の授業における「書くこと」

(1) 学習における書く活動

一般に生徒にとって英語を「書くこと」には大きく二つの意義があると考えられる。第一は、「言語材料の理解や定着を深めるため」である。例えば，教科書の新出単語や重要文等をノートに写したり，何回も書いたりすることである。また，授業において，聞いた英語を文字にしたり，読んだ英語を書き写したりする活動もこれにあたる。その英語が表す意味，音声，スペリングなどを生徒自身が理解し，定着させるために書く活動であり，書くための言語材料の基礎的・基本的知識を確実に習得させることである。

第二は、「自分の気持ちや考えを伝えるため」である。授業で学んだ単語や重要文を使って自分が表現したい内容を実際に書いて伝えることである。手紙やメール，感想文や報告書などが当てはまる。友人や教師といった読む相手や目的が存在するので，読む人の立場に立ってわかりやすく書くことが求められる。文字の丁寧さだけでなく，内容や文の構成も考慮した上で書くことが必要である。つまり，学んだ言語材料を実際の目的に応じて使いながら身に付けていく実践的な学習の展開が必要である。

このように，英語を「書くこと」には二つの意義があると考えられるが，これらは二律背反的なものではなく，バランスをとりながら指導していくことが大切である。

平成20年告示の中学校新学習指導要領では、英語の「書くこと」の目標を「英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。」と示している。「書くこと」では、与えられた単語を単に書き写すことなどができるだけでなく、自分の感想や考えなどを表現するために蓄積した知識を総合して書くことができることを目標としている。「書くこと」に関する言語活動は図1のとおりである。

「書くこと」の言語活動	
(ア)	文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書くこと。
(イ)	語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。
(ウ)	聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること。
(エ)	身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと。
(オ)	自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。

図1 中学校新学習指導要領「書くこと」の言語活動

3年間を通して(ア)や(イ)などの書くことにおける最も基礎・基本的事項を身に付けさせながら、(ウ)や(エ)といった自分とかわりのある内容について書き、最終的に(オ)のように複数の文でまとまりのある文章を書けるようにすることが求められている。

北原^{*1)}(2010)は、実際の授業における生徒の書く活動についての手順を次の五つの段階にまとめている。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① コピーできる。(教科書からノートへ、黒板からノートへ) ② 言えたことが書ける。 ③ 頭の中のストックを書く。 ④ モデルを真似て書く。 ⑤ オリジナルの文章を書ける。 |
|--|

この五つの段階においては、①が最も基本的な「書くこと」であり、⑤が最終的に目指す「書くこと」である。「英語を書く」と言った場合は最終的には⑤のことを目指すが、そこに至るまで生徒の実態に応じて①から④の段階を繰り返し指導する必要がある。

(2) 英語で書く上での課題

ア 生徒の立場から

生徒にとって、外国語である英語で文章を書くことは容易なことではない。母語である日本語であれば、ある程度書く内容と文章全体の構成、言葉遣いなどを同時に処理しながら文章を書くこともできる。これは生まれてから繰り返し使ってきて、基本的な文構造や語彙が音声とともに自然と身に付いているからである。当然のことながら、日常生活で使わない外国語である英語で自分の思いを表現するには大きな課題があると考えた。中学生の書く課題を次の3点にまとめた。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 自分の書きたい単語がわからない。(=単語レベル) ② それぞれの単語の並べ方がわからない。(=文レベル) ③ 相手がわかりやすいような文章を書けない。(=文章レベル) |
|---|

①については、当該単語に対する音声イメージがなく、辞書等で調べても自分のものになっておらず、表現までに至らないことや、音声と文字の関係が曖昧で、スペリングに自信が持てないことなどが原因として考えられる。②については、それぞれの単語をどのような順番で並べたらいいのかわからず、日本語とは異なる文構造について習熟していないことが考えられる。③については、読み手を意識した文体や的確な表現形式の基盤を持ち合わせていないために文と文とのつながりが弱まってしまうことが考えられる。

次に、授業における書く活動の課題として生徒が英文を書くプロセスが挙げられる。生徒

*1) 北原延晃 著『英語授業の「幹」をつくる本(下巻)』 2010年 ベネッセコーポレーション

は英語で文章を書く際には内容を日本語で考え、それを英語にすることが多い。そのため、文節ごとに同じ意味の英単語に変換し、その英単語を並べ換えて文を書くことに意識が偏りがちである。結果として、うまく英文にしたつもりであっても、語順が乱れていたり、語の選択が適切でなかったりする。また、一文を完成させることに集中し、全体としての内容のまとまりや論旨の一貫性に欠ける文章を生み出す結果となりやすい。

イ 教師の立場から

教師が授業の中でどのように書く活動を設定しているかにも課題がある。「書くこと」の指導においては音声表現に比べ、正確さが求められる。そのため、これまでの指導では、限られた場面設定と焦点化した言語材料の運用において与えられた日本語を英文にするという和文英訳がよく行われている。特に、生徒に新出の言語材料を定着させることを目的として生徒が表現したい内容よりも書かれた英文の正確さに重点を置いた指導が多く行われてきている。しかし、内容よりも形式を重視すると、生徒の発想を生かすことが難しいため、書く意欲の低下につながる。そこで、当該の指導場面において与えられた文構造を意識させ、正確性を求めながらも生徒の考えや気持ちを表現させる必要がある。書く意欲を高めるためにも書く内容に着目し、意欲的にまとまりのある文を書く指導が大切である。

また、「書くこと」の指導においては、指導する手順や要する時間に制限があるため、時間確保も課題である。例として、新出の文法事項の導入から書く活動を図示してみると図2のようになる。英語の4領域で指導過程を分類してみると、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、そして「書くこと」の順となる。これには大きく二つの理由があると考えられる。一つは、音声指導を文字指導よりも優先するからである。コミュニケーションの手段としての英語を身に付けるためにモデルとなる英語を聞き、聞いた英語を実際に話すことで習得することが基本になっている。もう一つの理由は、十分なインプットを与えなければアウトプットはできないからである。モデルとなる英語を聞いたり、読んだりして十分に入力（インプット）し、自分で理解（インテイク）した後、話したり書いたりして表出（アウトプット）するという言語を身に付ける考え方に基づいている。そのため、概して「書くこと」の指導は最後となり、指導する上で時間もかかるため、十分な時間が確保されていない状況になりやすいと考えられる。

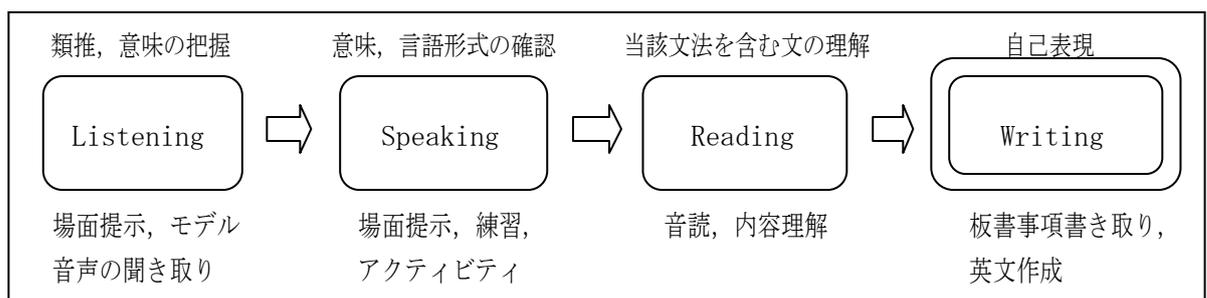


図2 新出の文法事項の導入から書く活動への展開

2 本校生徒の英語学習に関する意識調査の分析と考察

(1) 英語学習の現状

県では、児童生徒の基礎学力の向上を図ることを目的に、「基礎・基本」定着度調査を行っている。目安となる平均通過率は70%であり、70%を達成すれば基礎的・基本的事項が身に付いていると考えられる。

平成21年度「基礎・基本」定着度調査における「英語」の県の通過率は、1年生が70.0%、2年生が62.5%であった。また、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」という四つの内容・領域別では、「書くこと」の通過率がいずれの学年においても一番低く、1年生が60.7%、2年生が47.8%であった。それに対し、本校の「書くこと」の通過率は、1年生が52.9%、2年生が29.5%であり、県の通過率を1年生が7.8%、2年生が18.3%下回っている結果であった(図3)。特に「書くこと」の定着が図られていない実態が明らかとなっている。

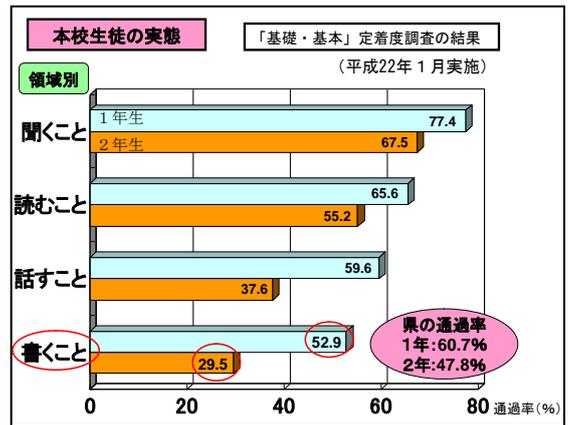


図3 「基礎・基本」定着度調査における領域別通過率

ここで、2年生の問題を例に挙げる。身近な話題について自ら書いて表現する場面(図4)であり、指定されたトピックについて自分の考えを与えられた語等を利用して3文以上書くことができるかをみる問題である。結果は県全体でも課題が残る問題となったが、本校2年生の74.0%が1文も正しい英文を書くことができなかった(図5)。



図4 「基礎・基本」定着度調査の大問11

- ア 自分の考えを記述する問題の通過率は、例年低い。英語で表現することに不慣れであり、どのように書いたらよいか分からないことが原因である。
- イ 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ち等を書くことは、既習の語句や文構造の活用を実感させる上で大切な学習活動である。
- ウ まとまりのある文章を書く力を高めるために、身近な話題(トピック)を提示し、どの程度表現させたいのかを中・長期的視点でとらえ、継続的な指導を行う必要がある。

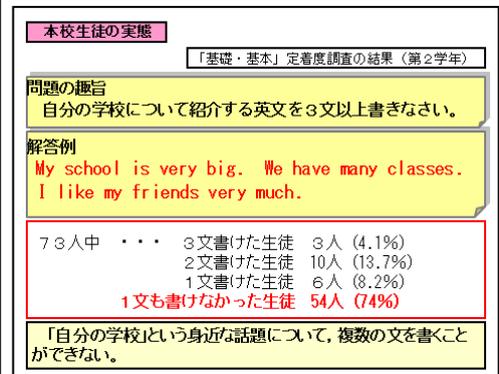


図5 「基礎・基本」定着度調査の大問11の結果

これらを受け、「英語で表現することに不慣れであるのか」、「自分の考えや気持ち等を書くことができるか」、「身近な話題について書いたことがあるのか」等に関して意識調査を行うことで研究の方向性を見いだすことにした。6月下旬に、本校の2年生全87人を対象にアンケート調査を行い、その結果からは次のような特徴が見られた。

- ア 家庭学習で時間をかけて英語を書いている生徒が多いが、教科書の単語や文がほとんどで、自分で考えた文を書く生徒は極めて少ない。
- イ 書けるようにするためには何回も書くことが必要であるとほとんどの生徒が答えている。
- ウ 書けない理由として、自分の英文が適切な表現か自信がないと答えている生徒が多い。

そこで、まとまりのある英文を書く時間を授業中で設定して段階的かつ継続的に書かせる手だてが必要であると考えます。

(2) 英語で身近な出来事等を書く力

前出のアンケート調査では2年生の約3人に2人が「過去の出来事（日記）について英語で3文以上書けない、またはあまり書けない」と回答している（図6）。実際は調査実施前に1単位時間ではあるが、モデル文を見ながら3行程度の日記を書く指導をしていたにもかかわらず、生徒は書くことに自信を持ってないでいる。作品を見てみると、単語の綴りや文法上の誤りが多く見られ、的確な英語表現とは言い難い（図7）。これは、教師が書く機会を適切に設定していないことと、生徒が正確さを意識して書いていないことに原因があるように思われる。一般動詞や不規則動詞の過去形という日記に必要な言語材料を学習しても、短時間で複数の文を書くことは難しいことが明らかになった。

また、アンケート調査において、どのような題材について自分の発想を生かしてまとまりのある英文を書いたことがあるかを尋ねたところ、自己紹介や他者紹介、好きな人や物などについては書いたことがあるが、それ以外の話題については書いた経験がほとんどないことが明らかになった（図8）。自己紹介や他者紹介、好きな人や物について書く活動は1年生の教科書の題材として示されており、生徒はそのことを覚えていたと言える。しかし、言い換えれば、授業でしかまとまりのある英文を書いたことがなく、書く機会が少ないと考えられる。

これら二つのアンケート調査結果から、英語で身近な出来事等を書く機会を設け、生徒の発想を生かしながら書く力をつけさせることが重要である。生徒にとって身近な題材を適切に設定し、まとまりのある英文を書く手順を具体的に示すことで、生徒に英文が書ける喜びや自信を与えることができる考える。

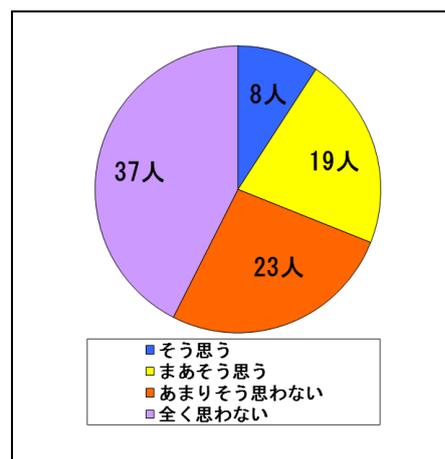


図6 過去の出来事について英語で3文以上書けるか

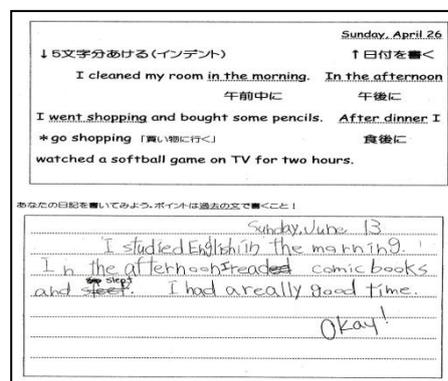


図7 過去の出来事についての作品例

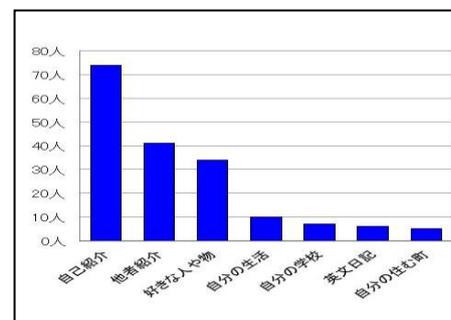


図8 英語で書いたことのある話題(複数回答)

3 中・長期的な到達目標の設定

(1) 目標とすべき「まとまりのある英文」

ここでは、まとまりのある英文について、その文章構成並びに題材について考察し、中学生にどのような形で提示していけばよいかについて述べる。

平成18年の中教審の審議経過報告によると、中学校・高等学校の英語指導において、「特に内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分身に付いていないため、文レベルではなく文章レベルの訓練が必要ではないか」と提言されている。そこでは具体的な数値を掲げた到達目標の例が示されており、「書くこと」に関しては次のとおりである。

与えられたテーマについて、短時間に5文程度のまとまりのある英文を書くことができること

しかし、「まとまりのある英文」とは具体的にどのようなものなのかは示されていない。また、単に一定の量の文量を書いたから「まとまりのある英文」とは言えないだろう。

大井*²⁾(2008)は、英語のまとまった文章を特徴付ける要素として「結束性 (cohesion)」と「論理の一貫性 (coherence)」の二つを挙げている。「結束性」を高める指導として二つの文を与えて適切な接続詞で結ばせたり、「論理の一貫性」を高める指導として文章の中から内容と合わない文を見つけさせたりすることが考えられる。大井は指導例の一つに、パラグラフ・ライティングを挙げている。パラグラフ・ライティングは導入、展開、結びという三つの構造からなる文章を書くことである。導入では一つの主張や主要テーマを述べ、展開では導入で述べた主張について理由を述べたり、具体例を挙げたりする。結びでは導入や展開で述べたことを踏まえてもう一度最初の主張を繰り返す。この考えに基づけば英文をどのように書いたらよいかが明確となり、生徒にとってはまとまりのある英文を書く大きな手がかりになると思われる。

大井の考えをもとに、本研究では中学生にとっての適切な分量や内容を考慮し、まとまりのある英文を「前後の文に意味的なつながりがあり、話題を提示するトピック文、話題を広げる展開文、そしてまとめの文から構成されたつながりのある文章」と考えた。

トピック文	… 主題の紹介, 話題提示, 立場表明 等
展開文	… 事実, 理由, 気持ちや考え 等
まとめの文	… 主張, 今後の予定や決意, 結びの言葉 等

ここで、教科書に掲載されている英文例を挙げ、トピック文、展開文、まとめの文という論の展開から作品を見てみる。まずは1年生の教科書(開隆堂 SUNSHINE ENGLISH COURSE 1, p. 70)に掲載されている3学期の英文例である。好きな人の似顔絵を描き、それを見せながら対話をした後に、まとめを三つの英文で書かせる活動である。

トピック文	I respect Ichiro.	トピック文	I like Kuraki Mai.
展開文	<u>He</u> is a famous baseball player. <u>He</u> plays very well.	展開文	<u>She</u> is a famous singer. <u>She</u> sings very well.
	(13 語)		(13 語)

トピック文で自分の好きな人物を紹介し、展開文を二つ並べてその人物についての事実を述べている。また、男性であれば He, 女性であれば She というように、主格の人称代名詞等を用いてトピック文を内容的に詳しく述べて展開している。1年生の作成する英文は、トピック文に関連した展開文を同じ文構造であっても多く書かせ、無理にまとめの文で結ばない指導も可とするなど柔軟に対応していきたい。

次に、2年生の教科書(開隆堂 SUNSHINE ENGLISH COURSE 2, p. 79)に掲載されている3学期の英文例である。最も楽しかった旅行について英文を書き、スピーチする活動である。

トピック文	Last winter, I went to Asahikawa with my family.
展開文	My aunt and uncle live <u>there</u> . In Asahikawa, I like winter better than summer. <u>When</u> I went <u>there</u> last year, I enjoyed skiing a lot. There was a lot of snow. Everything was white <u>and</u> clean <u>there</u> .
まとめの文	<u>I think</u> Asahikawa is one of the most beautiful cities in Japan.
	(58 語)

トピック文で旭川に行ったことを述べている。展開文では、旭川にはおじとおばが住んでいることやスキーを楽しんだこと、一面が銀世界できれいだったことなど、旭川を there で置き換えることで主題文と関連付け、事実や感想を具体的に述べている。1年生と違う点は、最後にまとめの文として自分の主張を述べていること、展開文では事実に基づいて自分の気持ちや考えを交えながら書いていること、代名詞や接続詞、複文等が使われていることである。

*²⁾ 大井恭子 編著『パラグラフ・ライティング指導入門』 2008年 大修館書店

最後に、3年生の教科書（開隆堂 SUNSHINE ENGLISH COURSE 3, p.73）に掲載されている3学期の英文例である。中学時代の思い出について5文以上の英文で発表する活動である。

トピック文	I'm going to talk about my favorite memory from junior high school.
展開文	It's a chorus contest held last November. We practiced hard every day. On the day of the contest we did our best and we won first prize! Next year, I'll go to high school.
まとめの文	I want to study music more to become a singer-songwriter.

(56語)

トピック文でお気に入りの思い出について話題を提示している。展開文では合唱コンクールという話題を代名詞 it で置き換えて、事実や感想を述べている。まとめの文ではその出来事から学んだ今後の決意を述べている。2年生よりも時制や文構造が複雑になり、代名詞や接続詞、副詞等を使うことで話が意味内容でつながり、より適切な言語形式が多く使われている。

各学年における英文例を見てきたが、中学校の段階ではまとまりのある英文は、話の意味内容のつながりがあることが条件になると考えられる。意味内容をつなげるために、トピック文、展開文、まとめの文という枠組みを与えたり、代名詞や接続詞等を積極的に使わせたりする必要がある。そこで、本研究では「まとまりのある英文」の文章構成を、「トピック文、展開文、まとめの文の三つの部分からなり、代名詞や接続詞、副詞等を適切に用いた意味内容が関連している英文」とし(図9)、最終的に短時間で5文以上書けることを目標とした。

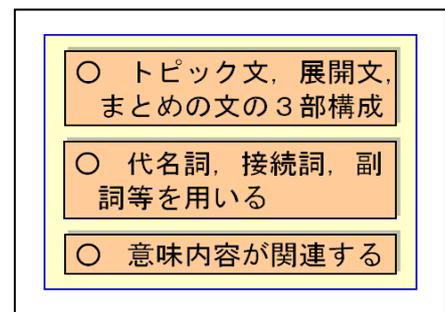


図9 まとまりのある英文の構成

次に、まとまりのある英文を書く上での題材や生徒の実態に合わせた文構造について述べる。まとまりのある英文を書く力を高めるためには、「書く題材」、「使用する言語材料」、「書く目的」の三つの要素が重要であると考えられる。「書く題材」を学校生活や日常生活などの中学生にとって身近なものにすることで、自分の経験や身の回りの情報を表現内容に取り入れることができる。「使用する言語材料」は、学習時に導入される文法事項等に限定せず、必要に応じて既習の言語材料を意図的に用いさせることで、言語の機能に注目させながら伝えたい内容を表現させることができる。また、「書く目的」を明確にさせることで書く意欲は向上すると考えられる。自分の近況を知らせる文章と何らかの意図を述べる文章では表現の形式が異なるため、コミュニケーションの中でどのように使われるのかを意識させることが必要である。

このように、「書く題材」、「使用する言語材料」、「書く目的」をはっきりさせることは生徒の書く際の心理的負担を軽減させたり、書く意欲を向上させたりすることにもつながると考える。

以上のことから、中学生が目標とすべき「まとまりのある英文」を次のようにまとめた。

- ・ 学校生活や日常生活などの身近な題材について書かれている。
- ・ 既習の言語材料を生かして書かれている。
- ・ 前後の文に意味的なつながりがある。
- ・ 文章全体がトピック文、展開文、まとめの文の三つの部分から構成されている。
- ・ 代名詞や接続詞、副詞等を適切に用いている。
- ・ 5文以上で書かれている。

(2) 「書くこと」における年間指導計画の必要性

一般的に、英語の授業は教科書の題材配列に沿って単元を一つのまとまりとして進められている。あるテーマについて英文を書く指導は、単元の終末や単元の間で1～2単位時間をかけて行う場合が多い。しかし、実際は生徒が書く英文量は少ない上に1文を作成することに困難が生じるなど、時間を設定した割には課題が残る現状が見られる。これには、題材と時間が適切に指導計画に位置付けられていないことにも一因があるように思われる。教科書に取り上げられている題材は生徒の日常生活に身近なものもあるが、異文化理解や自然科学といった題材については、そのままの形で生徒の書く活動につなげることは容易ではない。生徒が自己表現をするにあたって、自分の身の回りの出来事の中から興味深く発想しやすいことや学んだ言語材料を活用できるような題材を設定する必要がある。書く題材の設定にあたっては、生徒の学習段階に大きくかかわることから、書く指導における3年間の指導計画を作成し、3年間の指導の見通しをもつことが極めて重要である。

年間指導計画を作成するにあたり、次のような考え方が重要であると考えられる。まず、各学期の終わりや各学年の終わりに「これができるようになっている」という中・長期的な到達目標を設定する。次に、各学期内の単元、各単位時間で具体的に到達させたい目標を設定する。中・長期的な考え方に立った指導計画のメリットとしては次の五つがあると思われる。

- ア 中学校における3年間、1年間、各学期の到達目標が把握できるため、指導を計画的に行うことができる。
- イ 年度初めや学期の始めに生徒に具体的なゴールを示すことができ、目標をもたせることができる。
- ウ 何をすべきかが分かり、各学年、各学期、各単元、各単位時間の目標設定がしやすい。
- エ 具体的で明確な目標があるため、少人数やTTなど、複数の教師で指導する場合でも共通理解がしやすい。
- オ 教師と生徒が共通の目標を持つことで、評価がしやすく、フィードバックも行いやすい。

このようなメリットを生かし、生徒のまとまりのある英文を書く力を高めるために、学期や年間といった中・長期的な到達目標や身近な話題を設定し、単元を通じた指導を積み重ねていくことが有用であると考えた。生徒が学習の見通しをもつためには、教師が指導計画を基にして、生徒の実態に即した学習計画を立てていくことが大切である。

4 「書くこと」に習熟させるための手だて

(1) 既習事項を関連付けた学期単位の指導モデル

到達目標を達成するためには、各単位時間や各単元の内容理解や表現活動を順に実施していただくだけでなく、複数の単元を見通した上で言語活動を行うことが大切である。つまり、ある単元で扱った文法事項等の指導をその単元だけで終わらせるのではなく、既習の言語材料と使わせながら何度も繰り返し使用させることで定着が図られるのではないかと考える。併せて、書く指導においても、一連の活動で音声を通して定着した語彙や表現を活用することが大切である。実際、教師は新出の言語材料を指導するとすぐに生徒に表現させがちであるが、生徒は理解していても使えるまでには至っていないことが多い。

そこで、身近な題材について書く活動では、学習時の新出の文法事項を無理に当てはめるのではなく、伝えたい意味内容に必要な既習の語彙や文構造を学期という期間で活用することにした(図10)。

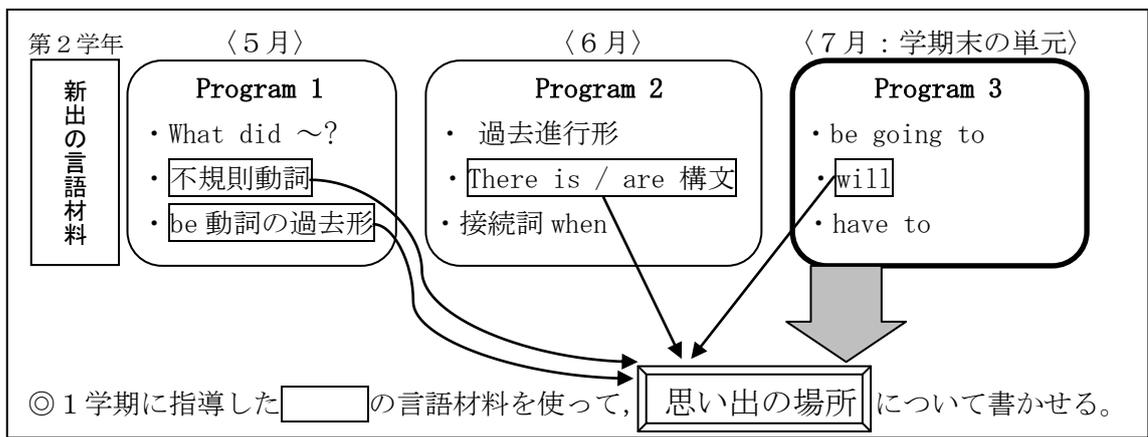


図10 学期における既習の語彙や文構造の活用例

図10のProgram 1で扱う不規則動詞を例に挙げる。get や take, have や go など、基本的な意味を持つ動詞ほど不規則動詞であることが多いため、過去の出来事を表現する上で重要である。不規則動詞を定着させるために、チャンツを用いて口頭練習で十分に慣れさせ、規則動詞との使い分けを繰り返し練習させながら、自己表現活動につなげるよう工夫する。7月には5月に指導した不規則動詞を振り返らせる指導を行い、既習の学習内容がつながるようにする必要がある。5月の自己表現活動においては、7月の「もう一度訪れたい思い出の場所」を題材とした書く活動を前提に練習を行う。

(2) 学期末の単元におけるまとまりのある英文作成の指導過程の工夫

中学校におけるまとまりのある英文を「書くこと」の指導は、一般的にモデル文を参考にしながら指示に従って英文を書いていく方法が効果的である。中学生の段階では、モデルとなる文を自分が書きたいことに置き換えることで一定の論の展開をもった英文を作成できるからである。しかし、単にモデル文を書き写させたり、単語を入れ替えさせたりするだけではあまり指導の効果は期待できない。

そこで、モデル文がまとまりのある文となるように次のような手順で指導することが大切だと考えた。

- ① まとまりのある英文になるようにモデル文をあらかじめ提示する。
- ② 文章ごとにモデル文を区切り、そのモデル文を含むスキットを練習させる。
- ③ 生徒の発想を生かし、既習事項を活用させながら書くことに結び付ける。

このように、各単位時間におけるモデル文を積み重ねることで、生徒は自然に文章全体の構成を学びながらまとまりのある英文を書けるようになるのではないかと考える。

表1 学期末の単元における指導の流れ

時	1 単位時間の授業内容	
	40 分	10 分
1	教科書の内容理解 1, 新出表現等	書く活動 1
2	教科書の内容理解 2, 新出表現等	書く活動 2
3	教科書の内容理解 3, 新出表現等	書く活動 3
4	第 1～3 時の新出表現の確認	書く活動 4
5	身近な題材についての言語活動 (書く活動 5)	

まとまりのある英文を1単位時間で完成させるこれまでの指導が十分に機能しなかったことから、学期末の単元では各単位時間の10分間を書く活動にあてることにした(表1)。各単位時間で取り扱う表現や題材は、学期内の重要文として導入や展開時に学習しているため、10分間でも書く活動に結び付けることができ、既習事項に対する有用感を与えることもできる。

指導の実際においては、目標モデル文を示し、全体像を示した上で、伝えるために必要な語彙や文構造を生徒から引き出したり、例を挙げたりする。そして、生徒自身が表現したい内容を段階的に示し、ペアやグループでの口頭練習の後に書かせることにした。例えば、将来の夢

についての目標モデル文が“I want to be a teacher.”の場合、teacherに入る職業名について辞書等を用いて調べて書き換えさせるのではなく、職業名のカルタカードを用いて覚えさせる。その後、“What do you want to be?” “I want to be a teacher.”という口頭練習で十分に慣れ親しませた後に書かせることが考えられる。

5 研究主題に関する実践例

(1) 各学年の「書くこと」の到達目標

本研究におけるまとまりのある英文についての考え方は既に述べたが、3年間の指導の見通しをもち、適切な年間指導計画を設定するため、学んでいる語彙や文構造など生徒の学習段階を考慮し、各学年の到達目標を設定した（表2）。

表2 各学年の「書くこと」の到達目標

学年	「書くこと」の到達目標
1	自分や周りの人の紹介を5文以上の英文で書くことができる。
2	事実に基づく自分の考えや気持ちを代名詞や接続詞等を用いて5文以上の英文で書くことができる。
3	立場を明確にし、説明や意見を代名詞や接続詞、副詞等を用いて5文以上の英文で書くことができる。

(2) 書く題材と目標モデル文

ア 書く題材

県内の中学校では、NEW HORIZON（東京書籍）、SUNSHINE（開隆堂）、NEW CROWN（三省堂）、TOTAL ENGLISH（学校図書）の4種類の英語の教科書が使用されており、扱われている主な題材をまとめると表3のようになる。

表3 英語の教科書で扱われている主な題材

学年	教科書の単元の題材	書く活動の題材
1	自己紹介 学校紹介 家族・友達紹介 手紙 日記（1日の行動） 旅行	自己紹介 我が家の行事紹介 友人や家族の紹介 我が町紹介 なりきり日記 好きな有名人 劇の台本 伝言メッセージ
2	日記（1日の出来事） 週末の予定 夏休みの思い出 旅行 将来の夢 私の好きなこと（もの） 私の住む町	おもしろ絵日記 将来の夢 紹介記事 得意な教科、苦手な教科 好きな季節 手紙 感想文
3	修学旅行の思い出 手紙 意見の主張 物語の感想 日本文化の紹介 文化の違い インターネット レポートまとめ	印象に残る体験 人生最高の日の日記 私の学校自慢 我が町○○！ 感想文 ボランティア報告書 好きな曲の紹介 日本文化の紹介

表3のとおり、生徒にとって身近な題材から国際理解的な題材へと、だんだんと対象が広がっていくことが分かる。これらの中から生徒が発想しやすく、無理なく自己表現できると考えられる題材を設定する。

また、生徒自身が自分の気持ちや考えを表現する上では、主体的に取り組む意欲が不可欠である。このことについては、田中・田中^{*3)}(2003)の挙げる自己表現の意欲を高める言語活動の条件である必然性、具体性、自己関連性、自由度の四つを参考にした(表4)。

これらの条件を踏まえ、教科書の題材や文法事項等に配慮した上で生徒が書いて表現したいと思うような場面や状況につながる身近な題材を選定した(表5)。

表4 自己表現の意欲を高める言語活動の条件

必然性	生徒が自然に表現してみたいと思うような場面がある。
具体性	活動内容を具体的にイメージできる。
自己関連性	自分のことや自分に関連した人物や事柄を取り扱っている。
自由度	生徒自身の意志や判断によって表現させる場面がある。

表5 各学年の身近な題材

学年	1 学期	2 学期	3 学期
1	自己紹介	家族・友達紹介	好きなこと
2	思い出の場所	将来の夢	ふるさと紹介
3	お気に入りの曲	携帯電話について	中学校の思い出

身近な題材の設定が単元ごとでなく学期ごとであるのは、その学期に学ぶ文法事項を繰り返し活用させるためである。

例えば、2年生(教科書は開隆堂 SUNSHINE ENGLISH COURSE 2)では新出の文法事項として、Program 1 で動詞の過去形、Program 2 で過去進行形や There 構文、Program 3 で助動詞等を学習する。そこで、「思い出の場所」(2年生1学期)という題材を設定することで、Program 1 からProgram 3 で学習した言語材料を用いてまとまりのある5文以上の英文を書かせることができると考えた。

イ 目標モデル文と指導の実際

書く題材に基づき、目標モデル文を作成した。目標モデル文の選定においては、既習の言語材料を用いながら、教科書の新出の言語材料も用いることを基本とした。例えば、前述した「思い出の場所」の目標モデル文は次のとおりである。

トピック文	My favorite place is Ibusuki.	} Program 1 で指導 } Program 2 で指導 } Program 3 で指導
展開文	I visited Ibusuki.	
	It was nice.	
	There is a sand bath.	
	It is hot.	
まとめの文	I will visit there.	
	I'm looking forward to my summer vacation.	

学期末の単元では、それまでの単元における各単位時間の10分間で扱ってきた言語活動の中から目標モデル文に関する言語活動を再度行う。目標モデル文は一文ずつ提示して積み重ねていき、単元が終わる時にはまとまりのある英文を書けるという自信を生徒に与えることをねらう。「思い出の場所」の目標モデル文は図11のように指導する。書く活動1では Program 1 で学習した動詞の過去形を、書く活動2では Program 2 で学習した There 構文を、書く活動3では Program 3 で学習した助動詞の will を復習させる。書く活動4ではトピック文を、書く活動5では積み重ねてきたまとまりのある文を書いて表現させる。

*3) 田中武夫・田中知聡 著『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』 2003年 大修館書店

また、学期末の単元における10分間の書く活動の指導過程は、図12のとおりである。モデル文提示、ペアワーク、英文作成という三つの段階を踏まえて指導する。まず、モデル文を提示し、生徒に既習事項を想起させる。次のペアワークでは、提示した目標モデル文の内容が答えになるような質問を用い、質問したり、答えたりする口頭練習をさせる。この際、必要となる語彙を確認し、生徒が自分の伝えたい内容を表現できるように支援する。そして、英文作成では生徒が必要な言語材料を選んで実際に英文を書く。ペアワークで自分が答えた内容を英文として書いて表現させ、さらに関連する語句や文を補足させる。この際、類似表現や言い換え例を例示し、生徒の英文作成時の発想を広げたり、語彙を増やしたりできるようにする。

書く活動における目標モデル文の指導例			
時	1単位時間の授業内容		「思い出の場所」の目標モデル文
	40分	10分	
1	教科書の内容理解1, 新出表現等	書く活動1	I visited Ibusuki. It was nice.
2	教科書の内容理解2, 新出表現等	書く活動2	There is a sand bath. It is hot.
3	教科書の内容理解3, 新出表現等	書く活動3	I will visit there. I'm looking forward to my summer vacation.
4	第1～3時の新出表現の確認	書く活動4	My favorite place is Ibusuki.
5	身近な題材「思い出の場所」(書く活動5)		

↓

まとまりのある英文作成

図11 書く活動における目標モデル文の指導例

段階	指導内容	教師の支援
モデル文提示	<ul style="list-style-type: none"> 目標モデル文を示し、既習事項を想起させる。 意味内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 既習事項を思い出させるような発問をし、補足説明をする。
ペアワーク	<ul style="list-style-type: none"> 目標モデル文を含むQ&A形式のスキットをペアで口頭練習させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頭練習に必要な語彙等もまとめて確認する。 できるだけ多く練習させる。
英文作成	<ul style="list-style-type: none"> スキットで自分が答えた内容の中から選んで英文で書かせる。 関連する語句や文を補足させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 類似表現や言い換え例を示し、表現の幅を広げる。

図12 10分間の書く活動の指導過程

(3) 「書くこと」の年間指導計画の実際

まとまりのある英文を書かせるための目標モデル文の年間指導計画及び身近な題材についての目標モデル文を併記した各学年における「書くこと」の年間指導計画を作成した。

ア 目標モデル文例

学年 学期	1年生	2年生	3年生
1学期	<p><u>自己紹介</u></p> <p><u>トピック文</u> My name is ~. I'm from ~. I like ~. I play ~. Nice to meet you. Thank you.</p> <p><u>展開文</u></p>	<p><u>思い出の場所</u></p> <p><u>トピック文</u> My favorite place is ~. I visited ~. It was ~. There is a ~. It is ~. I will visit there. I'm looking forward to my summer vacation.</p> <p><u>展開文</u></p> <p><u>まとめの文</u></p>	<p><u>お気に入りの曲</u></p> <p><u>トピック文</u> I'd like to tell you about my favorite song. It is "~." It is interesting for me to listen to the song. It is sung by ~. One of the members is ~. He looks ~. I like him very much.</p> <p><u>展開文</u></p> <p><u>まとめの文</u></p>
2学期	<p><u>家族・友達紹介</u></p> <p><u>トピック文</u> Good morning, everyone. This is my family. He is my father. She is my mother. And this is my sister. She likes ~. Thank you very much.</p> <p><u>展開文</u></p>	<p><u>将来の夢</u></p> <p><u>トピック文</u> Hello, everyone. I'm going to talk about my dream. I want to be a ~. Because I like to ~. To be a ~, ... I want to ~, if I ... I will do my best. Thank you.</p> <p><u>展開文</u></p> <p><u>まとめの文</u></p>	<p><u>携帯電話について</u></p> <p><u>トピック文</u> I think that we should use a cell phone. I have three reasons. First, ~. Second, ~. Finally, ~. So, I think that using a cell phone is ~.</p> <p><u>展開文</u></p> <p><u>まとめの文</u></p>
3学期	<p><u>好きなこと</u></p> <p><u>トピック文</u> I like violin. I like Hakase Taro. His music is very nice. But I can't play the violin well. So I play it every day. I really like music.</p> <p><u>展開文</u></p> <p><u>まとめの文</u></p>	<p><u>ふるさと紹介</u></p> <p><u>トピック文</u> ~ is the best place. Because ~ is famous for ... I like ~ the best. ~ is smaller than ... But, ~ is more beautiful than ... So, I like ~ the best.</p> <p><u>展開文</u></p> <p><u>まとめの文</u></p>	<p><u>中学校の思い出</u></p> <p><u>トピック文</u> I'm going to talk about my favorite memory from junior high school. It's a ~ held in ... We practiced hard every day. In the end, I ~ . This is the best memory that I have. Next year, I'll go to high school. But I'll never forget this memory. Thank you very much.</p> <p><u>展開文</u></p> <p><u>まとめの文</u></p>

イ 1年生「書くこと」の年間指導計画

※①～⑤は、学期における指導の順を示す。

	4月	5月	6月	7月	目標モデル文
1 学期	Let's start アルファベット 教室英語	Program 1 パーティで英語を話す。 be 動詞の平叙文・疑問文	Program 2 アンディー、武史の家へ行く。 三人称単数代名詞/What	Program 3 シンガポールからのお客さん 一般動詞の平叙文・疑問文	自己紹介 ①My name is Shimono Tetsuo. ③I'm from Nagoya. ④I like English. ⑤I play Kendo. ②Nice to meet you. Thank you.
	学期を通して書く身近な題材：自己紹介 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> ①自分の名前の紹介 ②初対面のあいさつ </div> ⇒ <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> 自分の写真の紹介 自分のお気に入りの紹介 </div> ⇒ <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> ③出身地の紹介 ④好きなものの紹介 ⑤部活動の紹介 </div> </div>				
2 学期	9月	10月	11月	12月	目標モデル文
	Program 4 キャンプの準備 名詞の複数形/How many/Who	Program 5 由紀、シアトルに行く。 命令文/Which/Where	Program 6 シアトルでの1日 三単現の一般動詞の平叙文・疑問文/When	Program 7 A Day at the Rodeo 一般動詞の過去形平叙文・疑問文/ How long	家族・友達紹介 Good morning, everyone. This is my family. ②He is my father. ②She is my mother. ①I have a sister. ③She likes chocolate. Thank you very much.
学期を通して書く身近な題材：家族・友達紹介 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> ①自分の兄弟の人数 ②自分の両親の紹介 </div> ⇒ <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> あいさつ 自分の家族の紹介 </div> ⇒ <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> ③家族が好きなものの紹介 </div> </div>					
3 学期	1月	2月	3月	目標モデル文	
	Program 8 Clean Energy 名詞の所有格/Whose/代名詞の目的格	Program 9 A Cool Car, a Clean Future 助動詞 can の平叙文・疑問文/How do you?	Program 10 A Busy and Happy Morning 現在進行形の平叙文・疑問文/What ~ doing?	好きなこと I like violin. ①I like Hakase Taro. ②His music is very nice. ③But I can't play the violin well. ④So I play it every day. I really like music.	
学期を通して書く身近な題材：好きなこと <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> ①自分の憧れる人物の紹介 ②憧れる理由 </div> ⇒ <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> ③自分ができないこと ④自分が頑張っていること </div> </div>					

	4月	5月	6月	7月	目標モデル文
1学期	Warm-Up 1年の復習	Program 1 How Did You Spend Your Vacation? What did ~?/ <u>不規則動詞</u> ・ <u>be動詞の過去形</u>	Program 2 Let's Enjoy a Potluck Party. 過去進行形/ <u>There構文</u> /接続詞 when	Program 3 A Trip to Australia be going to/ <u>will</u> /have to do	思い出の場所 My favorite place is Ibusuki. ①I visited Ibusuki. ②It was nice. ③There is a sand bath. ④It is hot. ⑤I will visit there. ⑥I'm looking forward to my summer vacation.
	学期を通して書く身近な題材：思い出の場所 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; text-align: center;"> ①過去に訪れた場所の説明 ②その時の感想 </div> ⇒ <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; text-align: center;"> ③その場所にあるものの説明 ④そのものについての感想 </div> ⇒ <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; text-align: center;"> ⑤今後の希望・決意 ⑥感想 </div> </div>				
2学期	Program 4 With Love and with Joy 1学期の復習	Program 5 You Look Great! <u>SVC(形容詞)</u> /SV00/SV+that節	Program 6 Our Hopes, Our Plans <u>不定詞(名詞的・副詞的)</u> ・形容詞的用法)	Program 7 Reach for Your Dream 動名詞/SVC(名詞)/ <u>接続詞 if</u>	将来の夢 Hello, everyone. I'm going to talk about my dream. ①I want to be a teacher. ②Because I like children. ③To be a teacher, I have to study English. ⑤If I go to America, I want to see the Statue of Liberty. ④I will do my best. Thank you.
	学期を通して書く身近な題材：将来の夢 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; text-align: center;"> 憧れる人物についての紹介 その人物についての感想 </div> ⇒ <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; text-align: center;"> ①将来の夢を述べる ②その理由を述べる ③課題, ④決意を述べる </div> ⇒ <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; text-align: center;"> ⑤夢が叶った時の希望を述べる </div> </div>				
3学期	Program 8 Our School Life <u>比較級/最上級/同等比較</u>	Program 9 A Cool Car, a Clean Future <u>比較級(more/better)</u> / <u>最上級(the most/the best)</u>	Program 10 Her Dream Came True. 復習		ふるさと紹介 ①Kanoya is the best place. ②Because Kanoya is famous for roses. I like red roses the best. Kanoya is smaller than Kagoshima. ③But, Kanoya is more beautiful than Kagoshima. ④So, I like Kanoya the best.
	学期を通して書く身近な題材：ふるさと紹介 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; text-align: center;"> ①最も好きな場所を述べる ②有名なものを説明する </div> ⇒ <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; text-align: center;"> ③他の場所と比べ, 良い点を挙げる ④結論を述べる </div> </div>				

エ 3年生「書くこと」の年間指導計画

※①～③は、学期における指導の順を示す。

	4月	5月	6月	7月	目標モデル文
1 学期	Warm-Up 2年までの復習	Program 1 Give It a Try! 現在完了(完了/経験/継続)	Program 2 On the Web 現在完了/ <u>仮主語 it</u> /SV+how to do	Program 3 Don't Ask Me That Question! <u>受け身</u> /SV0+how to do	<u>お気に入りの曲</u> ①I'd like to tell you about my favorite song. It is "NAMIDA." ②It is interesting for me to listen to the song. ③It is sung by FUNKY MONKEY BABYS. One of the members is DJ chemical. He looks funny. I like him very much.
	学期を通して書く身近な題材：お気に入りの曲 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;">①トピック文の構成例 お気に入りの曲名紹介</div> <div style="font-size: 2em;">⇒</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;">②その曲の感想 その曲に関するエピソード</div> <div style="font-size: 2em;">⇒</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;">③その曲を歌っている人 その人に関するエピソード</div> </div>				
2 学期	9月	10月	11月	12月	目標モデル文
	Program 4 A Red Ribbon 復習	Program 5 Working as a Volunteer SV0+to do/SVOC(形容詞)	Program 6 Okinawan Music 後置修飾(現在・過去分詞)/接触節	Program 7 Yuki in London SV+how 節/関係代名詞(主格 who/which)	<u>携帯電話について</u> ②I think that we should use a cell phone. ①I have three reasons. ①First, ~. ①Second, ~. ①Finally, ~. ③So, I think that using a cell phone is ~.
学期を通して書く身近な題材：携帯電話について <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;">①展開文の構成例 (複数ある理由の述べ方)</div> <div style="font-size: 2em;">⇒</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;">②トピック文の構成例 (賛成および反対の提示)</div> <div style="font-size: 2em;">⇒</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;">③まとめの文の構成例 (主張の確認, 投げかけ)</div> </div>					
3 学期	1月	2月	3月	目標モデル文	
	Program 8 The Olympic Gold Medal <u>関係代名詞</u> (主格 that, <u>目的格 which/that</u>)	Program 9 The Mountain that Loved a Bird 復習	3年間のまとめ	<u>中学校の思い出</u> I'm going to talk about my favorite memory from junior high school. It's a sports day held last September. We practiced hard every day. In the end, we won first prize. ①This is the best memory that I have. Thank you very much.	
学期を通して書く身近な題材：中学校の思い出 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;">①自分が得た最高の思い出の紹介</div>					

6 検証授業の実際と考察

2年生1学期の身近な題材「思い出の場所」について2年2組(29人)で検証授業Ⅰを行い、2学期の「将来の夢」についても同じく2年2組で検証授業Ⅱを行った。検証授業Ⅰでは既習事項を用いた10分間の書く活動において生徒の発想を生かした英文作成の指導が効果的に進められるかを主とし、検証授業Ⅱでは作成したまとまりのある英文をコミュニケーション活動に生かす指導に重点を置いた。

(1) 検証授業Ⅰの実際

ア 授業の概要

(ア) 単元名： Program 3 “A Trip to Australia” (SUNSHINE ENGLISH COURSE 2)

(イ) ねらい： Program 1 から Program 3 で学習した言語材料を用いて、「思い出の場所」について生徒に5文以上のまとまりのある英文を書かせる。目標モデル文で用いる言語材料は Program 1 の動詞の過去形，Program 2 の There 構文，Program 3 の助動詞 will である。目標モデル文は第1時から第4時まで1～2文ずつ提示して積み重ね，第5時にまとまりのある英文を書かせる。

イ 指導計画と指導構想

(ア) 単元の「書くこと」の目標

「夏休みにもう一度訪れたい思い出の場所」について書こう。

(イ) 単元の指導計画

時	40分間の指導内容	10分間の書く活動	
		目標モデル文	ペアワーク例
1	be going to の導入，説明 Section 1 の本文内容理解	I visited Ibusuki. It was nice.	A: Where did you visit? B: I visited Ibusuki. A: Oh, Ibusuki. How was it? B: It was nice.
2	will の導入，説明 Section 2 の本文内容理解	There is a sand bath. It is hot.	A: What is Ibusuki famous for? B: There is a sand bath. A: Oh, I see. How is it? B: It is hot.
3	have(has) to の導入，説明 Section 3 の本文内容理解	I will visit there. I'm looking forward to my summer vacation.	A: Will you visit Ibusuki? B: Yes. I'll visit there. I'm looking forward to my summer vacation.
4	助動詞のまとめ ペア・グループでの表現活動	My favorite place is Ibusuki.	A: Where is your favorite place? B: My favorite place is Ibusuki.
5	身近な題材「思い出の場所」について書く活動		
6	学習のまとめ		

(ウ) 第1時～第4時の指導構想

時間	第1時	第2時	第3時	第4時
6分	1 Greetings 2 Introduction ・Australia や homestay の紹介	1 Greetings 2 Review ・“be going to” を用いた英作文	1 Greetings 2 Review ・“will” を用いた英作文	1 Greetings 2 Review ・“have to” を用いた英作文
30分	3 Today's goal ◎予定や計画を言えるようにしよう 4 New words セクション1の単語確認〈発音・意味〉 5 Listening セクションを2回 6 Reading 様々なパターンで、できるだけ多く音読 7 Presentation of new target 教師のモデル文を聞かせ、内容を英問英答 8 Activity 数名の生徒に夏休みの予定について質問	3 Today's goal ◎自分の気持ちや考えを言えるようにしよう 4 New words セクション2の単語確認〈発音・意味〉 5 Listening セクションを2回 6 Reading 様々なパターンで、できるだけ多く音読 7 Presentation of new target 教師のモデル文を聞かせ、内容を英問英答 8 Activity “Will you go to ~?” を用いた活動	3 Today's goal ◎しなければいけないことを言えるようにしよう 4 New words セクション3の単語確認〈発音・意味〉 5 Listening セクションを2回 6 Reading Eメールの内容を読み取らせる 7 Presentation of new target 教師のモデル文を聞かせ、内容を英問英答 8 Activity “have to” を用いた活動	3 Today's goal ◎助動詞を使って、適切な表現ができるようになるろう 4 Reading 教科書の内容に関する英文を読み、英問に解答 5 Game グループで“助動詞カルタ”を行う 6 Confirmation “助動詞の歌”を紹介し、助動詞の意味のまとめをする
10分	9 Writing 書く活動1 過去の出来事の表現	9 Writing 書く活動2 現在の出来事の表現	9 Writing 書く活動3 未来の出来事の表現	7 Writing 書く活動4 トピック文作成
4分	10 Consolidation 次時の予告と評価 11 Greetings	10 Consolidation 次時の予告と評価 11 Greetings	10 Consolidation 次時の予告と評価 11 Greetings	8 Consolidation 次時の予告と評価 9 Greetings

ウ 「書くこと」に習熟させるための手だて

第1時における10分間の書く活動の指導過程は図13のとおりである。ここでは、モデル文提示、ペアワーク、英文作成という三つの段階を踏まえて指導した。モデル文提示では教科書を用いて生徒に既習事項を想起させた。ペアワークでは生徒が自分の伝えたい内容を表現できるように必要となる語彙を確認した。英文作成では生徒の英文作成時の発想を広げたり、語彙を増やしたりするために、類似表現や言い換え例を示した。

段階	指導内容	教師の支援
モデル文提示	<ul style="list-style-type: none"> 目標モデル文を提示し、既習事項を想起させる。 <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 第1時の目標モデル文 ① I visited Ibusuki. ② It was nice. </div> <ul style="list-style-type: none"> 意味内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 新出導入時（5月）の既習事項を思い出しやすいように、該当する教科書のページを開いて確認させる。 
ペアワーク	<ul style="list-style-type: none"> 目標モデル文を含むQ&A形式のスキットを互いにペアで口頭練習させる。 <div style="display: flex; align-items: center; margin-bottom: 10px;">  <div style="border: 1px solid blue; border-radius: 15px; padding: 5px; margin: 0 10px;">Hello. Where did you visit?</div> </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid pink; border-radius: 15px; padding: 5px; margin-right: 10px;">I visited Tokyo.</div>  </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-bottom: 10px;">  <div style="border: 1px solid blue; border-radius: 15px; padding: 5px; margin: 0 10px;">Oh, Tokyo. How was it?</div> </div> <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid pink; border-radius: 15px; padding: 5px; margin-right: 10px;">It was very big.</div>  </div>	<ul style="list-style-type: none"> 事前の調査から口頭練習に必要な語彙等もまとめて確認する。 例：nice, wonderful, great, interesting, fun, happy 等 時間を区切り、ペアを変えてできるだけ多く練習させ、表現に慣れさせる。 
英文作成	<ul style="list-style-type: none"> スキットで自分が答えた内容の中から選んで英文で書かせる。 <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; margin: 5px 0;"> ① I visited Tokyo. ② It was very big. </div> <ul style="list-style-type: none"> 関連する語句や文を補足させる。 <div style="border: 1px solid pink; border-radius: 15px; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 文末に last summer って書き足そう！ </div> 	<ul style="list-style-type: none"> 類似表現や言い換え例を示し、表現の幅を広げる。 例：① I went to Tokyo. ② I was very happy. 代名詞の it が何を指しているのか確認させたり、二つの文を接続詞 and でつなげたりさせる。 

図13 第1時における10分間の書く活動の指導過程

図13の第1時と同じ指導過程で、第2～4時の10分間の書く活動では目標モデル文に基づいた書く指導を行い、第5時の10分間の書く活動でまとまりのある英文を書かせた。

エ 検証授業Ⅰの成果と課題

(ア) 成果

10分間の書く活動の指導過程に重点を置いた指導を行い、一定の成果をあげることができたと考えられる。

- ・ 学期で学習した既習の語彙や文構造を活用させることで、生徒も意欲的に自己表現活動に取り組んでいた。
- ・ 授業における10分間の書く活動の時間を確保し、目標モデル文の提示やペアワークを継続することで、全員が5文以上のまとまりのある英文を書くことができた(図14)。ペアワークを通して他の技能と関連させることの大切さを実感した。
- ・ 身近な題材を設定し、英文作成時に似たような表現や言い換え例を提示することで、生徒の発想を膨らませることができた。目標モデル文以外にも自分の行動や感想を加えて書こうとする生徒も多く見られ、一人あたりの文数は7.8文、語数は37.1語であり、目標モデル文(7文30語)と比べ、一人あたり0.8文、7.1語の増加であった。

Hello, everyone.
My favorite place is Nagasaki.
I visited Nagasaki.
There is a Heiwa park.
I was very scared.
I will go there again.
I'm looking forward to my summer vacation.
Thank you very much.

図14 生徒の作品例

(イ) 課題

課題としては、大きく次の3点が挙げられる。

- ・ まとまりのある英文を書かせるにあたり、本単元の新出の言語材料である助動詞をうまく用いられない場合がある。具体的には、be going to と have to を用いさせることができなかった。
- ・ 10分間の書く活動において、必要となる語彙や文構造の確認に時間を要してしまい、英文作成の時間を十分にとれなかった。目標モデル文を修正し、書く時間を十分に確保する必要がある。
- ・ 図14のように書いた英文を生かし、生徒が自分の行動や気持ちなどを伝え合うようなコミュニケーション活動に結び付けるまで至らなかったため、活動の場を設定する必要がある。

(2) 検証授業Ⅱの実際

検証授業Ⅰの成果から、10分間の書く活動を継続した。検証授業Ⅰの課題を踏まえ、英文作成の時間を確保するために各単位時間における目標モデル文を1文に設定した。さらに、第5時に4技能を関連させた書く活動の指導を行い、第6時にスピーチ大会を設定した。

ア 授業の概要

(ア) 単元名： Program 6 “Our Hopes, Our Plans” (SUNSHINE ENGLISH COURSE 2)

(イ) ねらい： Program 5, Program 6 で学習した言語材料を用いて、「将来の夢」について生徒に5文以上のまとまりのある英文を書かせる。目標モデル文で用いる言語材料は Program 5 の SVC 文型, Program 6 の不定詞の名詞的用法と副詞的用法である。目標モデル文は第1時から第4時まで1文ずつ提示して積み重ねていき、第5時にまとまりのある英文を書かせ、コミュニケーション活動に結び付ける。

イ 指導計画と指導構想

(ア) 単元の「書くこと」の目標

「自分の将来の夢」についてのスピーチ原稿を書こう。

(イ) 単元の指導計画

時	40 分間の指導内容	10 分間の書く活動	
		目標モデル文	ペアワーク例
1	不定詞の名詞的用法の導入, 説明 Section 1 の本文内容理解	I want to be a teacher.	A: What do you want to be? B: I want to be a teacher.
2	不定詞の副詞的用法の導入, 説明 Section 2 の本文内容理解	Because I like children.	A: Why do you think so? B: Because I like children.
3	不定詞の形容詞的用法の導入, 説明 Section 3 の本文内容理解	To be a teacher, I have to study English.	A: What is the problem? B: To be a teacher, I have to study English.
4	不定詞のまとめ ペア・グループでの表現活動	I'll do my best.	A: Can you do it? B: I don't know, but I'll do my best.
5 (本時)	学習のまとめ① “自分の将来の夢”		
6	学習のまとめ② Let's Communicate “スピーチ大会”		

ウ 本時の目標

- (ア) 新出の文構造を用い, 積極的に自分の将来の夢について表現しようとしている。
- (イ) 自分の将来の夢について, 5 文以上の英文を書いて表現することができる。
- (ウ) 教師や友達の発表を聞き, その内容について理解することができる。
- (エ) 英語で友達に紹介する文の構成を知り, スピーチ原稿を作成できる。

エ 本時の実際

過程	時間	学習過程及び学習活動	形態	指導上の留意点	評価 (方法)
導入	6分	1 Greetings 2 Warm-up	一 斉 一 斉	<ul style="list-style-type: none"> • 元気よくあいさつをする。 • 教師のモデル文を聞き, 英語の表現に慣れさせる。 • Q&Aで内容を理解しているか確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 内容を正しく聞き取れているか。(観察)
					

展 開 1	27 分	3 Today's goal 	一 斉	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習内容を提示する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 「自分の将来の夢」について 5文以上の英文を書いてみんなに紹介しよう。 </div>	
		4 Speaking practice 	個	<ul style="list-style-type: none"> 自分の英文を音読させ、できるだけ暗唱させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 大きな声で音読できているか。(観察)
		5 Reading 『私の将来の夢』 	グ ル ー プ	<ul style="list-style-type: none"> グループ内でお互いの下書きを読みあわせる。その後に順に発表させる。聞いている人にあいづちや繰り返し、質問を用いさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 大きな声で発表できているか。また友達の発表を理解しているか。(観察, 自己・相互評価)
		6 Presentation 	一 斉	<ul style="list-style-type: none"> 友達の発表の内容をおおまかにつかませ、良かった点を発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の発表内容が理解できているか。(観察)
展 開 2	13 分	7 Writing 『私の将来の夢』 	個	<ul style="list-style-type: none"> 教師や友達の発表を参考に、既習の語彙や表現を用いるように助言する。 読む人の立場になって原稿を書くように助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> 正しいスペリングで、まとまりのある英文を書けているか。(作品)
ま と め	4 分	8 Consolidation 	一 斉	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習を振り返らせ、評価や感想を記入させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 客観的に振り返りができたか。(自己評価)
		9 Greetings	一 斉	<ul style="list-style-type: none"> 元気よくあいさつをし、学習意欲を喚起させる。 	

オ 検証授業Ⅱの成果と課題

(7) 成果

検証授業Ⅰ同様、一定の成果をあげることができたと考えられる。

- ・ 全員が自分の将来の夢についてまとまりのある英文を5文以上書くことができた(図15)。
- ・ 終末のカードを書く活動では、導入時におけるモデル文を聞くこと、展開時における音読練習で読むこと、グループ内でのプレゼンテーションで話すこと等、他の3技能と関連させることが書くことに習熟させることにつながると強く実感できた。
- ・ 事前に将来の夢についてのアンケートを実施し、その結果を踏まえて目標モデル文を複数設定することにより、生徒が表現したい内容をよりの確に表現させることができた(図16)。
- ・ 各単位時間における目標モデル文を1文にすることで10分間の書く活動の時間を充実させることができた。目標モデル文以外にも自分の行動や感想を加えて書こうとする生徒も多く見られた。一人あたりの文数は5.9文、語数は33.0語であり、目標モデル文(5文27語)と比べ、一人あたり0.9文6語の増加であった。
- ・ 図17のように、自分の将来の夢について表現できるようになったことを喜んでる生徒が多く見られた。



図15 生徒の作品例



図16 複数のモデル文を設定した例

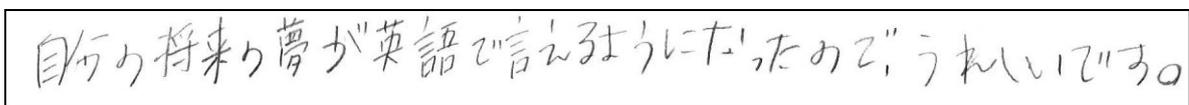
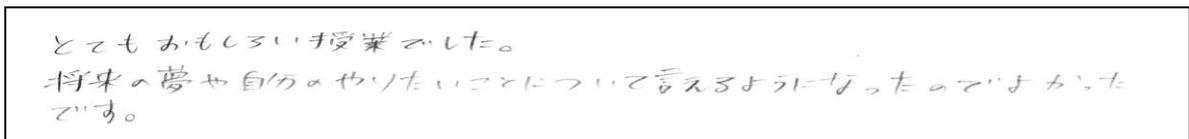


図17 生徒の授業についての感想文

(イ) 課題

課題としては、大きく次の2点が挙げられる。

- ・ 接続詞 if など未習の言語材料を提示する必要がある。また、将来の夢が具体的に決まっていない生徒が1人おり、その生徒は「優しい人になりたい」と表現したが、そのような生徒にも対応できるモデル文の提示も準備しておく必要がある。
- ・ 10分間の書く活動をスムーズに行うことができなかった。本来は学期の複数単元を通した指導を行うことが前提であることから、各単元における新出の言語材料を用いた言語活動を確実に行うことが大切である。

7 検証授業 I 及び II を通した生徒の変容

(1) 目標モデル文との比較から

本研究では、各検証授業で目標モデル文を設定して指導を行った。図18は目標モデル文と比較した一人あたりの文数と達成率、図19は一人あたりの語数と達成率である。

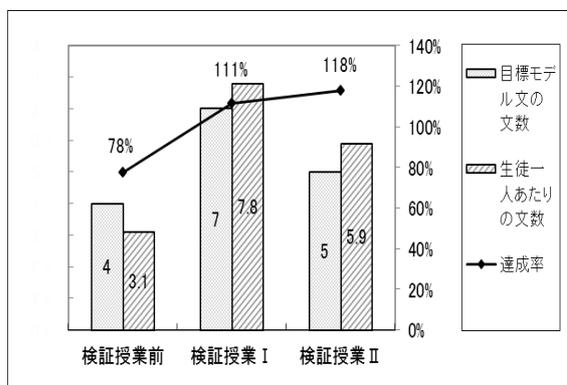


図18 一人あたりの文数と達成率

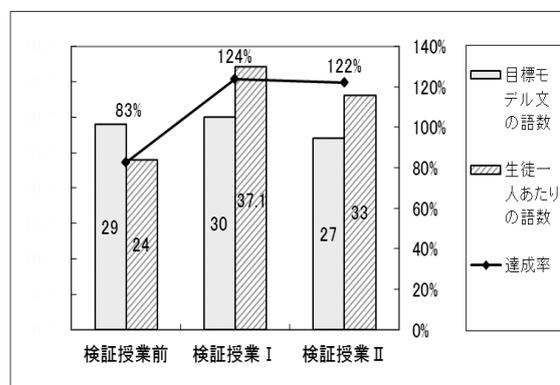


図19 一人あたりの語数と達成率

検証授業 I、検証授業 II のいずれにおいても、生徒は目標モデル文の分量を上回って書いていることがわかる。検証授業前の生徒の作品では目標モデル文に対して約 8 割の達成率であったが、検証授業で書いた作品では、目標モデル文と比べ 1～2 割の文数や語数の増加が見られた。

(2) 生徒の作品の変化から

指導過程による生徒の英作文の分量を比べるために、努力を要する生徒、おおむね満足できる生徒、十分満足できる生徒ごとに同一生徒の検証授業前の英作文と検証授業 I における英作文を比較した。

ア 努力を要する生徒

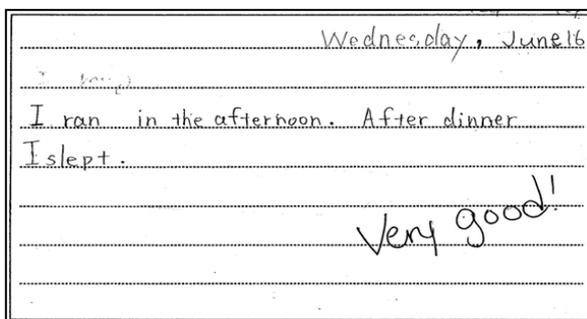


図20 検証授業前（6月）の作品

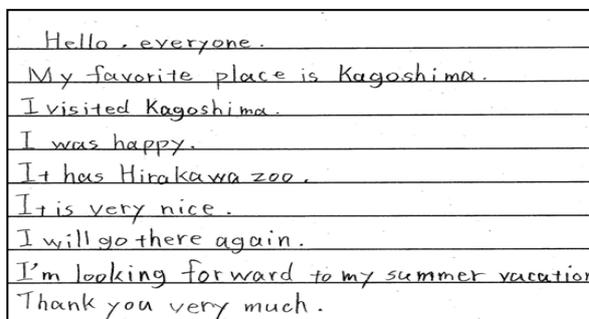


図21 検証授業 I（7月）の作品

イ おおむね満足できる生徒

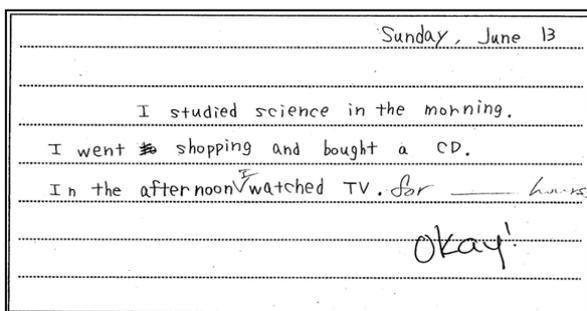


図22 検証授業前（6月）の作品

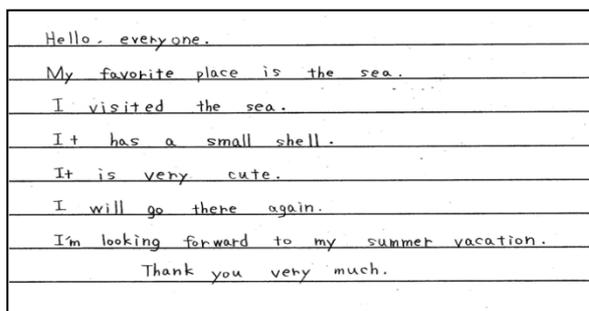


図23 検証授業 I（7月）の作品

ウ 十分満足できる生徒

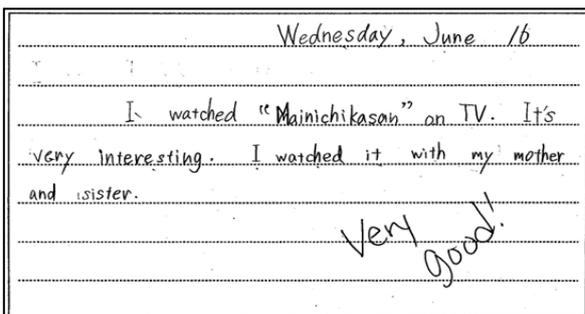


図24 検証授業前（6月）の作品

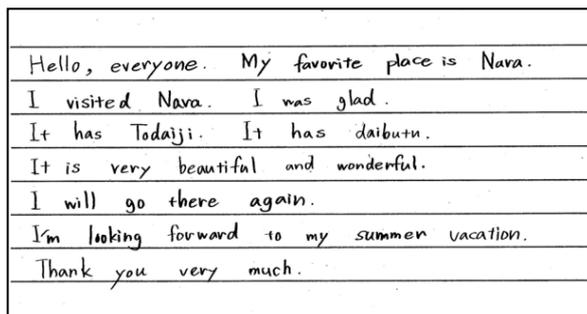


図25 検証授業 I（7月）の作品

いずれの生徒の作品を比較しても文数、語数ともに増加していることが分かる。また、検証授業前の作品（図20、図22）には表記上や文法上の誤り、主語の脱落があるのに対し、検証授業 I の作品（図21、図23）には文法上の大きな誤りは見られない。十分満足できる生徒の作品（図24、図25）を比較すると、代名詞や接続詞、副詞等を用いながら、10文もの英文を書いている。検証授業 I で生徒が書いた作品から、話の展開は似ているが5文以上のまとまりのある英文を書けることが分かった。

(3) 生徒の自己評価から

検証授業に対する生徒の自己評価から、生徒の意識を調べた。評価は4段階で行い、図26はコミュニケーションへの意欲や態度を、図27は言語についての知識・理解を表している。

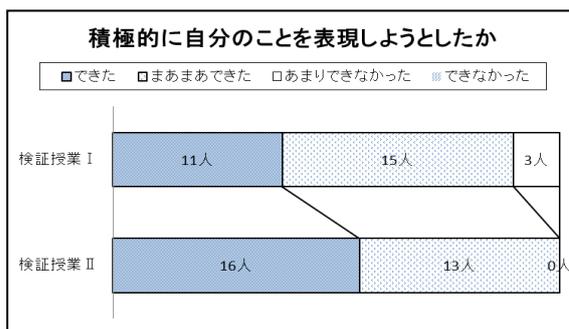


図26 意欲や態度に関する自己評価

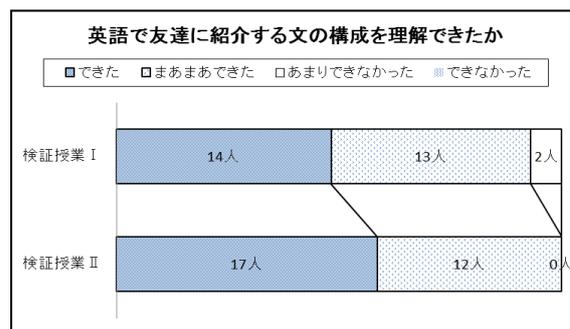


図27 知識や理解に関する自己評価

検証授業 I と検証授業 II を比較したところ、いずれの質問においても評価の向上が見られた。特に、検証授業 II では「あまりできなかった」と答えた生徒もおらず、全員が「できた」又は「まあまあできた」という肯定的な自己評価をしている。検証授業 I と検証授業 II の指導過程は同じであったにもかかわらず自己評価が全体的に上がった主な理由としては、生徒が検証授業の指導過程に慣れたことやスピーチ活動に向けて積極的に取り組んだことが考えられる。図28、図29は同じ生徒が書いた自由記述の感想である。

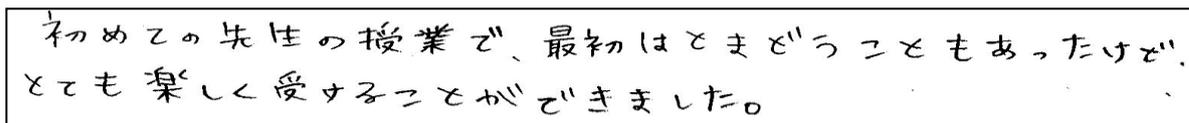


図28 検証授業 I に対する生徒の感想

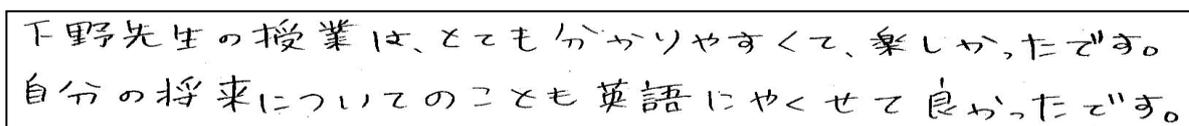


図29 検証授業 II に対する生徒の感想

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 中・長期的な到達目標に基づく課題設定と指導過程の工夫を行うことにより、生徒の書く英文量が増加したり、自分の表現したい内容を友達に紹介しようとしたりする積極的な態度が見られた。生徒にまとまりのある英文を書かせるために、生徒の学習意欲を保ちながら英語の4領域を関連させて繰り返し指導する必要性を強く実感できた。
- (2) 授業における書く時間の確保と目標モデル文の提示により、全員が5文以上のまとまりのある英文を書くことができた。検証授業前の生徒の作品やアンケート調査の結果から考えると、全員が5文以上のまとまりのある英文を書けたということは素晴らしい成果である。生徒にモデルを示しながら、英文を書くことを積み重ねることが重要である。
- (3) 身近な題材の設定により、目標モデル文以外にも自分の行動や感想を加えて書こうとする生徒も多く見られた。ワークシートに関連した絵を描かせることも、生徒の発想を広げ、表現しようとする意欲を高める手だてとなったようにも感じられた。
- (4) 「書くこと」の年間指導計画を作成することで、複数単元を見通した指導の例を示すことができた。新学習指導要領の全面実施に向け、生徒の言語活動を充実させるための一助となると思われる。

2 研究の課題

- (1) まとまりのある英文を書かせるにあたり、個に応じた話の展開を繰り広げさせる手立てが必要である。また、身近な題材についての文脈に新出の言語材料をうまく用いられない場合がある。特に、3年生で扱う言語材料を用いた身近な題材の設定は難しく、既習の言語材料の活用を含め、取り扱いに配慮が必要である。
- (2) 学期末の単元のみ10分間の書く活動では、必要となる語彙や文構造についての確認に時間がかかってしまったので、学期内の単元を見通した指導を行い、コミュニケーション活動の時間を十分確保する必要がある。
- (3) まとまりのある英文の評価方法についても研究していく必要がある。生徒の作品に見られる英文の特徴や誤答例を分析しながら、生徒の達成状況を適切に判断できる基準が必要である。

<引用文献>

- | | | | |
|-------------|----------------------|-------|--------------|
| ○ 文部科学省 | 『中学校学習指導要領解説 外国語編』 | 2008年 | 開隆堂出版 |
| ○ 北原延晃 | 『英語授業の「幹」をつくる本（下巻）』 | 2010年 | ベネッセコーポレーション |
| ○ 大井恭子（編著） | 『パラグラフ・ライティング指導入門』 | 2008年 | 大修館書店 |
| ○ 田中武夫・田中知聡 | 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』 | 2003年 | 大修館書店 |

<参考文献>

- | | | | |
|--------------------------|---------------------------------------|-------|--------------|
| ○ 岡秀夫ほか | 『英語教員研修プログラム対応「英語授業力」教科マニュアル』 | 2004年 | 大修館書店 |
| ○ 北原延晃 | 『英語授業の「幹」をつくる本（上巻）』 | 2010年 | ベネッセコーポレーション |
| ○ 小村照寿 | 『英語ライティングの技術』 | 2006年 | 三修社 |
| ○ 白畑知彦ほか | 『英語教育用語辞典』 | 2009年 | 大修館書店 |
| ○ 田尻悟郎 | 『（英語）授業改革論』 | 2009年 | 教育出版 |
| ○ 平田和人（編） | 『中学校新学習指導要領の展開 外国語英語科編』 | 2008年 | 教育出版 |
| ○ 和田稔（監修） | 『PCOLA デジタル版英語科教育授業実践資料集』 | 2007年 | ニチブン |
| ○ 鹿児島県教育委員会 | 『「基礎・基本」定着度調査結果（概要）』 | 2010年 | |
| ○ 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 | 『審議経過報告』 | 2006年 | |
| ○ 佐賀県教育センター | 『4技能「聞く・話す・読む・書く」を関連付けた中学校英語科学習指導の工夫』 | 2010年 | |
| ○ 高木晋 | 『中学校英語科における書く力を高める指導の在り方を探る』 | 2009年 | |
| ○ 平井早苗 | 『「書く力」を伸ばす英語の指導法』 | 2008年 | |

長期研修者 [下野哲生]

担当所員 [小林俊一郎]

【研究概要】

本研究は、生徒が身近な題材について5文以上のまとまりのある英文を書けるよう、「書くこと」の指導の在り方について研究したものである。

学級全員が自分の伝えたいことを書いて表現できるよう複数単元を見通した到達目標に基づく指導を試みた。具体的には、適切な題材を設定し、他の言語活動と関連させることで、積み重ねを重視した指導方法の開発及び検証授業を通じた当該指導方法を検証した。

その結果、年間や各学期といった中・長期的な到達目標に基づき、身近な課題設定を行い、学期末の単元において10分間の書く活動における指導過程を工夫することが、段階的にまとまりのある文章を書かせるために効果的であることが明らかになった。

【担当者の所見】

外国語科の指導においては、4技能を総合的に指導し、学んだことを活用して表現する発信力等を育成することが求められているが、まとまりある英文の作成など「書くこと」については依然大きな課題がある。本研究は、「書くこと」にかかわる課題分析を基に、書く題材、使用する言語材料及び書く分量を到達目標として明確に設定し、複数回に分けて指導する焦点化された実践研究である。

本研究では、単元の枠にとらわれず、学期における数単元の文法事項等から必要なものを選択して指導し表現させることに特徴がある。特に、書く活動において、生徒が困難を感じる自分なりの発想の広げ方や必要な語彙、文構造の選択について、指導者が「目標モデル文」を提示することで対応していることは、目標に準拠した指導という点で大変参考になる。指導者が、ゴールとなる質的・量的なめやすをモデル文として設定する過程で、生徒の実態を基に、中・長期的な表現の高まりについて見通しをもち、適切に指導することができるからである。

授業実践において、本研究に沿って目標の設定や指導の手だてを適切に行えば、ほとんどの生徒が5文以上書いて自己表現できることが検証されたが、今後の展望として言語の使用場面を工夫し、書く目的を明確にし、書いた内容について生徒が相互に意見を述べるなど他領域と関連付けた指導へと展開することを期待したい。



鹿児島県総合教育センター
平成22年度 長期研修報告書

